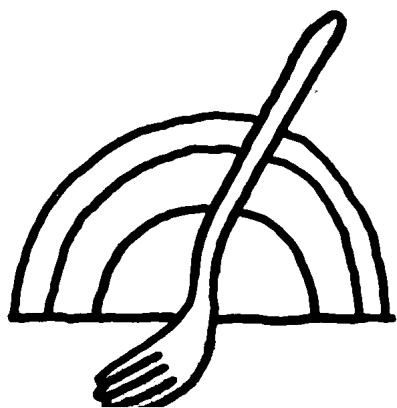


ドジリーヌ姫の優雅な冒険

小林信彦

ディナー姫の優雅な冒険

小林信彦



文藝春秋

小林信彦(こばやしのぶひこ)

昭和七年東京日本橋両国
生れ。射手座。三十年早
稲田大学英文科卒業。三
十四年から四年間「ヒッ
チコック・マガジン」の
編集に従事。主な著書に
「冬の神話」「ある晴れた
午後に」「家の旗」「唐獅
子株式会社」「衰亡記」
で第五十二回直木賞候
補。「丘の一族」「家の
旗」「八月の視野」で、
第七十四回、七十六回、
七十七回芥川賞候補。

ドジリーヌ姫の優雅な冒険

昭和五十三年七月二十五日 第一刷
昭和五十三年十月三十日 第三刷

価 八百八十円

著者 小林信彦

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話〇三六五一一二二一

印刷所 共同印刷
製本所 中島製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

目次

プロローグ

第一話	夜霧に消えた東坡肉 ^{トオシホロウ}
第二話	ババロアばあさん
第三話	一品料理のシャリアピン
第四話	アボカドの街角
第五話	どぜう相手のドジリーヌ
第六話	ダイエット・ビスケット
第七話	麵から出た面倒 ^{トラブル}
第八話	しちめんどくさい七面鳥
第九話	雑煮とスープーマン
第十話	餅は餅屋の春の宵
第十一話	玄人 ^{くろと} うなぎ
第十二話	スモーガスボードで終幕 ^{ファイナル}

あとがき

裝釘
平野甲賀
画
小林泰彦

ド
ジ
リ
ー
ヌ
姫の優雅な冒険

プロローグ

裏日本の港町は、なぜか、祭礼であつた。

敏子は踊り狂う人波を縫つて港の方角へ走つた。二階堂さんが行つてしまふなんて、そんな……

しかし、そんなという心の動きの底には、（やっぱり……）という氣持もあつた。二階堂秋彦に逢つたときから、自分はこうした別離を予感していたのだと想ひかへした。

△敏子さん、ぼくを忘れて生きて下さい。悪人どもは、ぼくがやつつけますから……△と言って雄々しくも眼を細めた二階堂秋彦。あの人の辞書には不可能の文字がなかった。この町に一大トルコ・センター建設を企んだ太田黒組の野望は、二階堂秋彦の活躍によつて潰えたのであつた。敏子は走る。ひた走る。

二階堂秋彦は列車で、または自動車で、町を去つてもよいはずであつた。むしろ、それがふつうのような氣がする。しかし——再びしかし——二階堂さんはフェリーで去つてゆくにちがいないという確信が敏子にはあつた。あの人はギターを片手にフェリーのデッキに立っている……そうでなければならぬのだ。

二階堂さんは自分自身を入さすらい人^{びと}△と呼んでいた。……さすらい人という△と△船で去つてゆく△というイメージが彼女にはあつた。

……ずっとむかし、小学校のころだが、父に連れられて、そんな映画をいくつも観た記憶がある。映画の中のヒーローは、いつも涙をいっぱいに湛えた美少女によって見送られていたのだ。……

敏子は波止場に出た。

フェリーは、いままさに岸壁を離れたところであった。沖に向って、大きく向きを変えようとしていた。

(遅かった……)

彼女は二階堂秋彦の姿を探し求めた。

やはり、いた。……こっそり去ってゆく人にしては、なぜか堂々と、テンガロン・ハットに白背広の上下という、それじたい目立たずにはいない服装で甲板に立ち、くわえ煙草の煙がしめるのか、眼を細めて、波止場を眺めている。この町で起ったさまざまな出来事を回想するためではなく、忘れ去ろうとするかのように。

二階堂さん、と叫びたい衝動を敏子は抑えた。あまりに、はしたない。それに、私は恋する人を見送るという行為そのものに酔いしれているのではあるまいか。

そのとき、突然、フェリーが沈み始めた。甲板の人々を襲ったパニックはすさまじかった。「助けてくれえ、泳げないんだ!」

二階堂秋彦の叫びがきこえ、敏子は衣服をすべて脱ぎすてて海にとび込んだ……。……。

第一話 夜霧に消えた東坡肉^{トオンブオロウ}

1

「ごく簡単なことだよ」

と二階堂秋彦は妻の敏子に言った。

「洋風のコーンスープはだれでも作る。要はカニを入れるかどうかだ。カニは身をほぐして作ればなおいいが、こんな風に罐詰でやってもいい。罐詰に残った汁もスープの中にあけちまう。ほら……これで、中華風コーンスープができあがった」

「すばらしいわ」

敏子の眼は輝きをおびてくる。

「どこから思いついたのかしら」

「香港にさすらいの旅を続けたとき、アバディーンの水レストランで飲んだのさ。旅行客用の通俗的なメニューの中の一品だが、妙に記憶に残った」

「あなたって記憶力が抜群なのね」

「む、それは言える」

秋彦は当然のように頷いた。

「ぼくのさすらいの旅は、正義と暴力と食欲にみちていた。きみと結婚するまでは」

敏子はスープの味を見ようとして小皿を探した。食器戸棚をあけると、数枚の皿が床に落ちて砕けた。

「あ……」

ごめんという言葉を呑み込んで立ちすくむ。

女子大生のころは△阿修羅姫▽と呼ばれたことがあった。あるときは△こわし屋▽、また、あるときは△恐怖のデストロイエンヌ▽、しかし、その実体は？……

ひとくちでいえば、たぐいまれな美貌と非のうちどころのないスタイルの持ち主であるにもかかわらず、彼女は生れつき、ひどいドジなのであった。

スキー場へ行けば、借りたスキーを折り、リフトから落ち、軽井沢へ行けば友達のを格調あるホテルの玄関に突っ込み、海岸ではビーチパラソルごと強風に飛ばされた。そのため、友達、彼女を△受難の聖ドジリーヌ▽とさえ呼んだ。

秋彦を救ったときは、これはもう、彼女の一生に一度しかないのではないかと思われるほど、ドジらなかったケースである。△愛のみがドジを越える▽——これが彼女の信念であった。

（だが、こまかくみれば、彼女はあるとき、全裸になる必要はまったくなかったのである。も

つとも、秋彦が心を打たれ、結婚を決意したのは、彼女のそのドジぶりを△大いなる愛▽と勘違いしたためではあった。）

「コーンスープに入れるのは、カニの代りに、豚、魚、エビでもいい。鶏の笹身をみじん切りにしてから、庖丁でたたき身にして卵の白身の固く泡立てた中に混ぜたのを入れれば、雞粥包米だ」(注1)

なんてすてきな人だろう、と彼女は思った。結婚して二年たったいまでも、彼女の体内を甘美な戦慄が走るのだ。

なんとという超人、なんとという男——かつて秋彦を知った多くの男も、また、そう言ったらしい。

二階堂秋彦が愛したのは、北国、さすらい、流水、網走の黒い鳥、美しい女性、ギター、馬、彼を慕う少年、十数年まえの日活映画……そして、料理であった。結婚したときは三十一歳、敏子は二十四歳であった。

そしていま、彼は三十三歳で、敏子(ドジコなどと呼ぶ者もあったが、夫はそんな呼び方はしなかった)は二十六歳。ときとして霧笛の一つ二つはきこえる横浜山手のとあるマンションの2DKに住んでいる。泳げないにもかかわらず、なぜか、夫は海を愛していた。

(夫の職業は何なのだろう?)

謎であった。秋彦は黙して語らず、敏子がふとその質問を口にしたときは、かげりのある暗

い眼を伏せた。さすらい人の宿命さだめであろうか。

電話が鳴った。

秋彦は送受器に手をのぼしながら、

「ガスを消してくれ。とろみをつけたら長く火にかけないことだ」と言った。

敏子はガスを消した。料理学校に通ったにもかかわらず、彼女は料理が苦手であつた。

「なに？」

夫の声には緊迫したものが感じられた。

「……わかつた……夜までには……」

電話が切れた。

夫は窓ごしに海を見つめていたが、やがて、決意したように言った。

「午後の新幹線で神戸へ行く」

まただ、と敏子は思った。

ときどき電話がきて、夫は旅に出る。長ければ数週間、短いときは数日。

いっお帰りですかとたずねてはいけないのだつた。夫が拳銃を入れたショルダー・ホルスターを身につけるところを見てもならないのだ。△いっお帰りですか？▽とたずねることによつて、さすらい人をサラリーマンに墮落させてはいけない。

むかしの女性なら、即、千人針をさし出すところであろう。だが、彼女にできるのは、涙にうるんだ瞳をつと、そらすだけであつた。

「いままできみに説明したことはなかったが、今回は例外だ」と秋彦は言つた。

「神戸の剛田組という組織から、ある中国人を助けたことがある。林というレストラン経営者だ。そのレストランを含む一帯の土地を剛田組が狙っていたので、やつつけてやった。……ところが、十年もたつて、また同じことが始まつた。いまの電話は林からだ、いやがらせにコックが殺された」

「まあ」

敏子は怯えた。血まみれのおそろしい世界。しかし、夫は行くのだ、丸井のマークのついた古いダスターコート影をひいて。

「大丈夫かしら？」

夫の行く先々で土地の乗とり事件が起るのはなぜだろう。もっとも、今度は、いわばアフターケアだ、しかも命がけの。

「きみも行くんだ」

乱にいて治を忘れずというか、夫はスロープを指さしていた。

「私が行つてもいいの？」

「そうさ」

「うれしいわ」

「物見遊山じゃない。たった一人のコックが殺されて、林のレストランは困っている。他のコックたちは旧正月で香港に帰っているんだ」

「まさか……」

「そう」と夫はやさしく頷いた。「きみがコックの代役をするんだ」

「だって……」

彼女は動転していた。こんなムチャなことがあるだろうか。オムレツさえ焦げつかせてしま
う自分が……。

2

新神戸に着くまでは、さしたることもなかった。

敏子のミスといえば、寝ぼけて、京都駅のプラットホームに降りたことぐらいである。

あわててまた車内に戻り、コートのすそをドアにはさまれた。この程度のドジだったらましな
方であるというまでもない。

神戸は坂の多い町である。

わかってまんがな、などと言ってはいけない。こういう一行がないと、小説にはならないのである。木曾路はすべて山の中である、と藤村は長編の一行目をおごそかに書き出している。こういうヒジョーにアタリマエのことを書くのも、小説の一要素なのよ。世の人がすべて「アンアン」「ノンノ」の読者で、神戸について視覚的イメージを持っているわけではないのだ。そこで――

△神戸は坂の多い町である。▽

神戸は、という三文字で、夫妻が神戸に着いたことを示し、坂の多い町である、で、二人が坂を眺めているかのようなイメージを読者にあたえようと作者は心がけているのである。この簡潔さを買っていただきたい。

トア・ロードを登って左側にある小さなビルの二階が「灣仔飯店」だ。ドアに「本日臨時休業」の紙が貼ってある。

秋彦は先に立って狭い階段を上り、社長室に入った。

ふちなし眼鏡をかけた小肥りの中年男が立ち上り、

「お待ちしておりました」

と△待▽にアクセントのある日本語で言った。

「みっともないはなしです。またしても二階堂さんの手をお借りするとは……」

「なーに、大したことじゃ……」

と秋彦はダスターコートのままで応じた。

「コックさんが殺されたんですって」

「左様……。このビルの横に死体が転がっております。一発で胸を撃ち抜かれて……」

「銃声はしなかったのですか？」

「消音器サイレンサーを使ったのでしょうか」

「そうだ……妻の敏子です」

秋彦は一步退いて紹介した。

「わたくし、林であります」

「ほかのコックさんは、明後日、帰られるのでしたね」

秋彦は椅子の脇掛けに腰かけたまま言った。

「はい。しかし、明日も店を締めしておくわけにはまいりません」

「大丈夫。一日ぐらいなら敏子が面倒を見られます。中華料理は得意なほうですから」

「これはしあわせ」

林のもったいぶった仕草は、敏子の眼にはテレビの深夜映画の藤村有弘のように映じた。

「いろいろ作って頂くわけにもまいりますまい。マネージャーには言い含めておきますから、五品ぐらいを沢山作っておいて出すスタイルにしましょう。……そうですね、東坡肉トウオロウだけは今夜のうちから蒸しておいて頂いたほうがいい」